

上演と陰謀

高野 秋広

小泉 聡史

鈴木 誠

水木 陽子

火野 真由美

石沼 すず

大学のキャンパス。野外ステージで演劇部がリハーサルをしている。演目はソポクレス「コロノスのオイディプス」

水木「女の人がわたしどものほうへ近づいて来るのが見えます、アイトナの若駒に乗って。頭にはテッサリア風の日除けのフェルトの帽子。あれ、これはあの女か、それとも違うか。気の迷いか。そうでございます。いいえ、そうではない、わたくしにはわかりませぬ。ええ、どうしよう！ ほかでもない、あの人でございます。こちらに近づきながら、目を輝かして、わたくしに挨拶いたしております。たしかにあれは、イスメネでございます」

高野「なんだと、娘」

水木「お父さまの娘、わたしの姉妹、もうじき声で、おわかりになりますわ」

火野、現れる。

火野「お父さまとお姉さま、お二人のなつかしいお名前！ やっとのことでお二人を見つけ出したと思えば、涙でお姿がよく見えませぬ」

高野「わが子よ。来たか」

火野「お父さま、みるも情けないそのお姿」

高野「わが子よ、ついたか」

火野「それも苦勞の多いことございました」

高野「おれにさわっておくれ、娘よ」

火野「両の手を両のお手に」

高野「わが子、わが姉妹よ」

火野「みじめにも憐れな暮らしでございます」

高野「この子とおれのことか」

火野「それからこのわたくしも含めてでございます」

高野「わが子よ、なんで来た」

火野「お父さまを思うて」

高野「おれに会いたさからか」

火野「それからわたくし自身でお知らせしたかったのでございます、たった一人だけの忠実な召使をつれて」

高野「お前の血をわけた二人の若者たちはいったいどこで何をしているのだ」

火野「ただいまいるところにおります、……」

水木「……二人は」

火野「二人は、……ええと」

水木「二人は今や恐ろしい境涯に」

火野「二人は今や恐ろしい境涯に」

高野「わが子よ、そなたはカドメイアの町人にかくれて、この身に関する神のお告げをみんな知らせに来てくれた。おれがああ地から追い出された時、そなたはおれの忠実な番人となったのだ。さあ、こんどは父に、イスメネ、どんな知らせをもって来たな。なんのつもりで家を立って来た。というのは、何もなしにそなたは来たのではない、それをおれはよく知っている、何か恐ろしいことをおれにもたらさないでは」

火野「……」

高野「台本、見ていいよ」

火野「……（読む）わたくしは、お父さま、どこにお住まいかを探しているあいだの苦労は申し上げますまい。それをお話し申して、またも苦労を思い出しようはございませんから。そうではのうて、あなたの二人の不仕合せな男の子がいま陥っている禍い、それをお知らせにまいりました。初めは二人は、一族のあの古くからの破滅への道、それがどんなにお父さまの不幸な家にとりついたかを、冷静に眺めながら、王座をクレオンにゆずり、国は穢れをうけないようにする気でおりました。ところが、今では、どなたかは存じませぬが、神さま、それから罪深い心とから、この三重に不運な二人を無慚な争いが襲いました、治世と王の力を手に入れようとて。そして血気にはやる年下のほうが、兄ポリュネイケスから王座を奪い、国から追い出しました。あの方は、わたくしたちのあいだのもっぱらな噂では、アルゴスの盆地に亡命者となって行き、新しい親族と盟友たちとを得たと申します。アルゴスがカドメイアの地をすぐさま手に入れて、名誉を得るか、それともかの地の名を天にまでとどろかせるか、決しようとの心組みでございます。これは、お父さま、ただの口先だけのことではのうて、いいえ、恐ろしい事実でございます。神々がどこでお父さまのお悩みに、憐れみをおかけくださいますことか、わたくしにはわかりませぬ」

高野「なに、そなたは神々がおれを憐れんで、いつかは救いたもうという望みをもつにいたったのか」

火野「そのとおりでございます、お父さま、このご神託によりまして」

高野「それはどういうのだ。神の言葉とはなんだ、わが子よ」

火野「死んでも、生きていても、かの地の住人たちは、幸いのために、汝を求めるであろうと言うものでございます」

高野「だがおれのような人間が誰の役に立つというのだ」

火野「お父さまには、彼らの力を左右なさることが、おできになるとのことでございます」

高野「ちょっと、とめようか」

火野「……」

高野、小泉と石沼に意見を求める。

小泉「いや、大したことじゃないけどさ。気になったことは、イスメネが到着する前のアンティゴネの気持ちはどうなっているのかってことかな。かなり揺れているわけだよね。それがちょっと見えないっていうか、うまくそれが外に出てないって感じたな」

水木「揺れてるって？」

小泉「だって、こっちに来るのが、妹なのかどうなのかわからないで判断に迷ってるわけでしょ」

水木「それって動揺してるってこと？」

小泉「うん、ま、そうだけど」

水木「動揺と判断に迷うことは同じじゃないでしょ。大雑把な感情表現で動揺してるのを見せるのなんて、最低の演技じゃない」

小泉「……あ、いや」

水木「もちろん、私もうまくやれてる自信はないけど。セリフの一字一句に感情をのせていくと演技が説明的になって、この上演の演出方針と合わないでしょ」

高野「石沼さんは、どう」

石沼「この作品に演出方針ってあるんですか」

水木「あるわよ、一応」

石沼「一応か。一応ですか」

水木「見えないことは、見えないままで、安易に見えるようにしないってことですよ。それは基本ですよ、この上演の。……それはだって、まだ、有効な演出意図のはずよ」

石沼「北浦さんのですか」

水木「……」

小泉「私が気になったのはそんな大げさな問題じゃなくて、やって来るのがイスメネかどうかを迷っているアンティゴネの気分のことだけだよ。それははっきりと見て取れる心理なんだから、ただ単に、わかるように演技すればいいと思うけど」

水木「そのレベルの感情表現と何かに動揺しているのでは全く意味が違うでしょ」

小泉「あ。だから、おれはそのレベルでの感情表現のことを言ったんだけど」

石沼「動揺してるって言ったのは、鈴木さんですよ」

小泉「動揺っていうか、揺れてるってことだよ。誰がこっちに来るのか理解できないことに揺れてるんだよ」

石沼「誰がここに来るのかわからないってことだけで、アンティゴネの内面は揺れているわけじゃないと思います」

小泉「そうだよ。そもそも、ここは異境の土地なんだから、オイディプスもアンティゴネも不安で仕方がない。それはわかった上で、イスメネがイスメネに見えない不確かさはあるわけでしょここに」

火野「……でも、イスメネには、アンティゴネがよく見えている。鮮明に。報告内容を携えて、ここを目指して来たんだから」

小泉「え。……それで」

水木「じゃ、なに。なにに、動揺してるの彼女は」

石沼「……」

水木「ね。わからないのよ。なにもわからない。とっても漠然としてる。そうでしょ」

皆、思案する。

火野「……はい」(挙手)

高野「なんでしょう、火野さん」

火野「私、セリフ覚えます」

皆、笑う。

石沼「合宿稽古、最終日ですよ」

高野「じゃ、休憩しよう。2時再開ってことで」

皆、食堂や購買部へ。

高野のところへ、水木、来て。

高野「あ。食堂行く？」

水木「ATMでおカネおろして来る」

高野「そう」

水木「代理って言ってもさ、高野くん演出なんだから。……時間ないよ。みんなの意見とか聞いている場合じゃないと思う」

水木、去る。

火野、来る。

火野「どうしたんですか？」

高野「いや」

高野、火野、食堂へ。

テーブルに来て。

高野「火野さんって、なに考えてるの。リハーサルするとき」

火野「え。いろんなこと考えてます。だから、ダメなんです」

高野「そう。なんで」

火野「まあ、役になりきってないっていうか」

高野「それでいいんじゃない」

火野「それも、北浦さんの演出方針ですか」

高野「北浦くんは関係ないよ」

火野「だって、北浦さんの演出って棒読みでしょ。感情なるべく入れないでぼんやり演技する、みたいな。これかなり反発あったって思うんですよ」

高野「ああ、まあ、ね」

火野「ここのところの稽古見てると高野さんもそれ修正しないでそのままでもいい感じじゃないですか。私はそっこのほうがいいんで、それはそれでいいんですけど。部員の中にはかなり抵抗あるみたいです。このままじゃ、観客ひきつけられない、もとのやり方に戻そうって」

高野「役になりきるほうがよっぽど抵抗あるけど」

火野「北浦さんもそうでした」

高野「だからさ、北浦は関係ないって」

火野「演出かわったわけだから、もっと、高野さん色出せばいいのに」

高野「いいよ、そんなの」

高野、うどんをすする。

高野「陽子もそんなこと言うんだよな」

火野「ああ、水木さんも、へー」

高野「姉妹だからかな」

火野「え。ああ、二人ともオイディプスの娘ってことですか」

高野「ま、関係ないけど。それこそ、役と俳優本人を結びつけるの、北浦が一番嫌がってた」

火野「そうでした」

火野「なんの話でしたっけ」

高野「え……稽古のときなに考えているか」

火野「一瞬、あ、今いいこと考えてるって思うんだけど。だから夢に似てますね。ああ、これいい夢だなんて感じでいい夢みてたんだけど、朝になったら全部忘れてる。あんな感じですね。

高野「ふーん」

火野「セリフしゃべっているときも、いろんなこと思いつくんだけど、イメージってすぐに消えていくでしょ、それを再現することなんて無理なんじゃないかな」

火野「ちょっと、聞いてるんですか」

高野「聞いてるよ」

火野「高野さんはどうなんですか」

高野「夢中だから、なんにも覚えてないけど」

火野「役に集中してるってこと？」

高野「まあね。そうしないと失敗するし」

火野「水木さん、怒ってました？」

高野「え。なにを」

火野「さっき、なんか、しゃべってたでしょ」

高野「どうかな。ま、イライラはしてたけど」

火野「私、セリフ入ってないのに、水木さんばかりがダメ出しされるし、イライラもするよね」

高野「ね。思いついたイメージが人にバレるってこともあるでしょ、火野さんの場合」

火野「は。なんで、ないですよ」

高野「今、怒ってるなとか、今、機嫌悪いなとか、なんかイライラしてるな、とか」

火野「え、なんで負のイメージばかりなんですか。それにイライラしてるのは水木さんでしょ」

高野「むしろ他人のほうに、さとらせるっていうのかな、自分の気持ちを無理やり」

火野「私ですか、それ」

高野「うん。顔とか態度にでるとかじゃなく。一種の特殊な能力として」

火野「そんな、迷惑じゃないですか。そんなのないですよ私に。え、ありますか」

高野「陽子の場合、顔にでるけど、火野さんは、そうじゃない。人に自分の思ってることをさとらせるんだ」

火野「じゃ、今、私なに考えてると思いますか？」

高野、うどんをすすする。

火野「ね。……高野さん」

高野「わからん」

火野「え」

高野「わかりません」

火野「なんですか、それ。……あ、水木さん」

火野の視線の彼方、食堂の窓際に、水木がいる。高野も見る。日替わりを食べている。

火野、「水木さーん」と手を振る。水木、軽く返す。

火野「なんだ。こっち来て食べればいいのに」

高野、食べ終え、食器の返却口へ。火野も続く。

高野「あ。おれ購買寄って行くから」

火野「はい」

火野、歩いていると。もの影から、鈴木が顔を出す。

鈴木「火野さん」

火野「わ、びっくりした」

鈴木、手招きする。

火野「え、えなに」

鈴木「ちょっと話しがあって」

二人、人気のない講義棟の廊下に来る。

鈴木「火野さん、きみも知っての通り、ぼくは北浦さんの失踪のことをあれからずっと調べているわけなんだ」

火野「ああ。そう」

鈴木「北浦さんはもう戻って来ないよ」

火野「え、どうして」

鈴木「ぼくはとても恐ろしいよ」

火野「え、なに、どうしたの」

鈴木「3ヶ月前に、南相馬の海辺に行ったことまでは掴めたんだ。複数の人物がそう証言している」

火野「一人で、それとも誰かと一緒だったの」

鈴木「一人で、それも車で向かったらしい。ちょっと潮風に当たりたいてって言って」

火野「へー。それで」

鈴木「だから、海を見に行くって」

火野「うん」

鈴木「それっきり、そのあとの消息がつかめないんだ。友人から借りた車は駐車場に戻って来てるらしんだけど、本人だけがいなくなってるんだよ」

火野「だって、乗って帰って来たんじゃないの」

鈴木「その友人は、北浦さんから直接キーは渡されてないんだよ。キーは車にさしたままだったんだ」

火野「あ。そう」

鈴木「あ、そうって。北浦さんは海を見に行くって言ったんだよ。海を見に行くって言った人間が一人、現に海に消えてるんだよ」

火野「え。ちょっとまって。なんで、それで消えたことになるの」

鈴木「これにはなにか、ある」

火野「なにが」

鈴木「なにかがだよ」

火野「ちょっと、まあ、落ち着こうよ」

鈴木「北浦さんが、わりと今の日本の政権に批判的だったの知っているでしょ」

火野「ああ。なんか、国会前のデモとか行ってたのは聞いたことがある」

鈴木「そんな、浅いところで何かをしていたわけじゃないんだよ。なんか、あの人、深いところで活動してたみたい」

火野「ええ？」(笑う)

鈴木「火野さん、これは笑いごとじゃないよ」

火野「いや、だって、深いところってなんなの」

鈴木「わからない。わからないけど、北浦さんが海で姿を消したことは確かなことなんだ」

火野「ま、そうだけど。じゃ、そんな大ごとなら、警察とか、もう動いてるでしょ」

鈴木「火野さんは、今の日本の警察を信用できると思うのかい」

火野「……」

鈴木「それで、渡すものがある」

鈴木、鞆から、空き瓶を取り出す。その中には手紙が入っている。

鈴木「これだけど」(と、渡す)

火野「なにこれ」

鈴木「ぼくも、行って来たんだよ、南相馬の海へ。近くに火力発電所のある浜辺だった。そこでそれを見つけたんだ」

火野、瓶の中身を見る。

鈴木「手紙が入ってるでしょ。そこには火野さんの名前が書いてある」

火野「ああ、うん」

鈴木「ほんとびっくりしたよ。……おそらく、差出人は北浦さんだと思う」

火野「え、なんでよ」

鈴木「信じるも信じないも、勝手だけど。宛先は火野さんの名前なんだから。火野さんの手紙であることは確実でしょ」

火野「え。どうして、そうかな」

鈴木「ただ、ぼくは仲介役を務めただけだよ」

火野「……え」

鈴木「みんなは、北浦先輩と水木さんがつきあっていると聞いていたけどそうじゃない。本当にあの人がおもっていたのは、火野さんのことだったんだよ」

鈴木「確かに渡したから」(と身支度的な仕草)

火野「ちょっと待って。稽古あるから。……これから、野外ステージで。ポリュネイケス、出番だから」

鈴木「ああ。ちょっと今日は」

火野「いやダメでしょ。鈴木くん稽古ずっと来てないし。明日は本番なんだから」

火野、歩き出す。

火野「ほら、行くよ」

鈴木「行くけど。今日、バイトなんで、夕方から抜けることになるかな」

火野「それ、高野さんに言って」

火野と鈴木、野外ステージへ。

部員たちも参集して。

水木「ほれ、あそこに、どうやら、あの他所の国のお人がまいったようでございます。供の者もなく、一人で、お父さま、涙を流しながらここへ」

高野「何者だ」

水木「前からわたくしどもの考えていたポリュネイケスがまいりました」

小泉「ポリュネイケス、あなたの、これまで歩んだ道は感心しない。さあ、はやく立ち去るがよい」

高野「お前だ、おれをこの苦しみのお友としたのは。お前だ、おれを追ったのは。お前のおかげでさまよいつつ、その日の糧を他人に乞うているのだ。もしもこの娘たちが生まれて、おれの養い手になってくれていなかったら、お前なぞどうあろうと、おれは生きてはいなかったろう。今ではこの二人、おれの養い手がおれの命を保ってしてくれる。二人はおれと苦勞を分かち男だ、女ではない。ところがお前たちはおれの子ではなく、他人の子だ。それだから、もしこの軍勢がテーバイの町に向かって現在進んでいるのならば、運命はただいまお前を眺めてい

るまなざしとは違ったまなざしで、やがて眺めることだろう。おのれ、立ち去れ、おれに忌み嫌われ、父なしで。悪の権化め、このおれがお前にあびせかける呪いをいだいて、一族の地を槍で下すことも、山に囲まれたアルゴスに帰ることもなく、兄弟の手にかかって死に、お前を追い出した者を殺すのだ。これがおれの呪いだ」

鈴木「ああ、憐れなはおれの旅、おれの失敗、おれの仲間だ。われらのアルゴスからの出征は、なんという最後に達することか。不幸なはこのおれだ。おれが戦友の誰一人にも言えぬような最後だ。軍を返すこともならず、黙ってこの運命にあうほかはない。この人の娘で、おれの姉妹たち、父上のこの冷酷な呪いの言葉を聞いたからには、神々にかけて、この父上の呪いが成就して、お前たちが国に帰れるようなことがあれば、おれの名誉を毀損せず、埋葬と葬礼とを与えてくれ。お前たちがこの人に尽くしたことに對して、今この人から克ち得たあの賞賛は、おれの奉仕によって、それに劣らぬ賞賛をもたらすことであろう」

水木「ポリュネイケス、わたしの言うこと一つ聞きいれてください」

鈴木「愛するアンティゴネ、なんだ。言うがよい」

水木「軍勢をアルゴスに戻してください、大急ぎで。あなた自身とテーバイの国を滅ぼすのはやめてください」

鈴木「だが、それはできないことだ。ひとたびおれが尻込みすれば、どうしてふたたび同じ軍を率いることができよう」

水木「ですが、お兄さま、どうして二度とお怒りになることがありましよう。祖国を覆して、何の得がございませす」

鈴木「国を失った者の生活、長男たるおれが兄弟からこのように嘲笑をうけるのは、恥辱だ」

水木「それでは、あなた方お二人が互いの手にかかって死ぬるとい、お父さまの予言を成就することになるのですよ」

鈴木「そうだ、それが彼の望みだ。だが、おれは退くべきではない」

水木「まあ、悲しいこととございませす。あの方がなさいませすような予言を聞いて、誰があなたに従うものがありましよう」

鈴木「おれは凶報は知らせはしないつもりだ。よいことのみを告げ、悪いことは言わぬのが、立派な大将の勤めなのだ」

水木「お兄さま、それでは、それがお覚悟でございませすか」

鈴木「そうだ、引きとめないでくれ、おれは、このおれの父親とその報復の女神たちの忌わしい運命の不吉なこの道を歩まねばならぬ。おれの生きているあいだにはもうふたたび何もおれにしてくれることはできないのだから、おれの望みを死んだときにはもうふたたび何もおれにしてくれることはできないのだから、おれの望みを死んだ時に果たしてくれれば、ゼウスがお前たち二人の道を幸多くしてくだいませすように。さあ、放してくれ、ご機嫌よう。もう二度とふたたび生あるおれに会うことはあるまい」

水木「ああ、なんと悲しいことを」

鈴木「おれのために歎くな」

水木「前もってわかっている死にお急ぎのあなたを誰が歎かずにいられましよう、お兄さま」

鈴木「定めとあれば、死ぬほかはない」

水木「いいえ、そうではございませせん、わたくしの言うこととお聞きいれになつて」

鈴木「無益な説法をするな」

水木「お兄さまをなくしては、どんなに悲しいことか」

鈴木「いや、それは運命の神にかかっている、こうなるか、ああなるかは。お前たち二人のために、けっして不幸にあわぬよう、おれは神々にお祈りをする。誰の目にも二人は不幸になるにはふさわしくないからな」

鈴木、去る。

小泉「新たに新たな禍いが来た、重い運命にみちて、かのめしいの人から。あるいは、これは運命がその終結へと進みつつあるのであろうか。神々に布告は何事も行われぬとは言えぬ。見ている、見ている、これを常に時が、あるものは覆し、またあるものは次の日にふたたびその運を持ち上げて。ゼウスよ、空が鳴りひびくわ！」

高野「で、ここで雷鳴を入れる」

石沼「あ。ここはまずくないですか」

小泉「そうそう。このあとの、オイディプスの死の場面にとっておいたほうがいいよ」

石沼「そうです」

高野「じゃ、小さく入れるのはどうかな」

石沼「うー。微妙ですね」

小泉「だってこれ雷鳴が小さく入るようなセリフじゃないよ。空が鳴りひびくわ、だよ」

水木「あれ、鈴木くんは？」

火野「あ、なんか、バイトがあるって」

雨が降ってくる。

合宿所。夜。

皆、酒など飲んでる。

その一画のソファーに水木。高野、来て。

高野「氷、いれてこよか」

水木「え。あ、ありがとう」

高野、キッチンへ。

水木「ちょっと、誰か音楽かけてよ」

高野、ウイスキーの水割りを水木に渡す。

水木「雨、ひどそうね」

高野「うん。明日大雨だったら中止にしようか、上演」

水木「雨天決行でしょ」

高野「雨になるなんて思ってもいなかったな」

水木「うそ。心配だったくせに。そんな感じで北浦くんを演じるのやめてください」

高野「なんだよ。それ」

水木「心配性の人物は楽天家を演じているものよ」

高野「あいつだって、本当はどうだったか、わからないさ」

水木「高野くんの気持ち、私なんでも読めるんだから」

高野「人の気持ち読めるヤツいたり、人に気持ち読ませるヤツいたり大変だよこのサークルは」

水木、音楽に合わせて揺れる。

水木「なにこれ、レゲエ？」

石沼「レゲエです」

水木「ああ、フェス行きたーい」

水木「なんか、高野くん、さっきのリハ、テンション高くなかった」

石沼「ああ。おのれ、立ち去れのところでしょ」

水木「そうそう」

高野「鈴木くんの顔見てたら、つい熱が入ってしまうんだ」

小泉「なんで」

高野「なんでかな。こわいっていうか」

小泉「どうして」

石沼「ここにきて、バイトって。明日、来ますかね」

高野「そりゃ、来るでしょ」

石沼「いや鈴木さんなら、わかりませんよ」

高野「ちょっと、やめてくれよ」

石沼「私、代役とか、絶対しませんから」

水木「でも、ポリュネイケス、セリフだけは完璧だったわ」

火野「テセウス。ねえ、テセウス」

小泉「あ、おれ」

火野「なんでテセウスは私たちに意地悪なんですか」

小泉「え」

火野「だって、お父さんのお墓の場所、教えてくれないじゃないですか。それじゃお弔いもできません」

小泉「ああ、なんでかな。意地悪なんかじゃないと思うけど。きみたちのお父さんとは秘密の約束を交わしたわけだからね」

高野「ま、おれとしては娘たちにはお参りに来てもらいたい気分もあるけどね」

石沼「あ、そうだ。今日はなんの日だと思いますか？」

小泉「すずちゃんの誕生日」

石沼「ノーノーノー、ノーノーノー。ノーノーノー、ノーノーノー。今日は、わたーしのー、失恋記念日なんですー」

小泉「へー」

水木「知らねーよ」

火野「まーまー」

水木「もっと、音大きくして」

石沼「はい」

石沼、ラジカセの音量を大きくする。皆、踊る。

稲光がする。そして雷鳴。皆、黙る。

石沼「雨、やみそうにないですね」

小泉「誰だよ、野外公演しようって言ったの」

火野「北浦さんです」

小泉「あのバカがいいそうなことだよ！」

皆、笑う。

停電になる。皆、身がすくむ。

火野「あ。停電」

小泉「ロウソクとか、ないかな」

高野「ないよ」

石沼「雨、ひどいんですね」

皆、スマートフォンの光を頼りに、動いたり、場所を占めたり。

小泉「……あいつ、オイディプスをやりたかったっからしい」

水木「え、誰」

小泉「鈴木くん」

火野「あ、そうなの、へー。意外」

高橋「言えばよかったのに、キャスティングのとき」

火野「北浦が失踪して当然、高橋が演出になったら、おまえが役者もやるなんて思ってなかったんだ」

水木「それって勝手な思い込みよね」

小泉「そうだけど」

石沼「私もそう思ってましたよ。えー演出と主役かねるんだって」

高橋「いや、だからさ、言えばいいだろ。いまさら、こんなところで言わないで」

光と雷鳴。

小泉「近いな。雷」

長い沈黙。遠雷。

高橋「わたしが、なにを、考えているのかわかるなら、当ててくれ」

高橋「なにを思っているのか。わたしが、今、なにを」

火野「……え。誰に聞いてるんですか」

石沼「火野さんじゃないでしょう」

火野「え、わたしじゃないの。え、なに、それ。セリフ？ギリシャ悲劇の」

高橋「わたしは、水木陽子に聞いている」

水木「……」

小泉、キッチンの窓のほうへ。

小泉「外の方が明るいよ、すずちゃん」

石沼「そうですか。あ、そうですね」

石沼もキッチンのほうへ。

小泉、石沼の身体を触る。

石沼「あ、ちょっと。やめてください」

水木「暗闇は人間を野性に戻すのだ」

火野「小泉さん、最低ですね」

水木「火野さん、私に隠してることあるでしょ」

火野「え、ないですよ」

水木「あるでしょ、秘密」

火野「ないですよ」

水木「あるある」

火野「いや、ないって」

水木「ふふ」

火野「ふふってなんですか」

火野「じゃ、いいです。あるってことで」

高野「ああ。そうか。そうなんだ。きみたちは、なんだよ。そうなんだよ！」

水木「え」

火野「なに、言ってるの」

高野「わかった。火野さんはね、だってだって、水木さんに隠し事なんてできないんだから。なぜなら、なぜならだよ。うまく凹凸がはまっているというか、こう、ネジ釘とネジ穴のようにうまく整合性が取れてるんだよ。互いに引き合う力で。だって、人に心をさとられる人と人の心を読む人が、ああ、ああ、いま、まさに、出会ってるんだね。どうしようどうしよう」

水木「なにが、どうしようなの」

火野「あ、また光った」

轟く雷鳴。皆、耳をふさぐ。

やがて、石沼が来る。

石沼「ちょっと、みなさん、来てもらえます」

3人「え」

石沼「二階の廊下です」

そして、小泉がいるところに皆来て、廊下にある窓の外を見る。

小泉「あれを見てくれ、運動場のとこ」

石沼「鈴木さんですよ」

火野「暗くてわかんないけど。誰かいるみたいね」

稲光。

水木「あ」

火野「鈴木くん」

小泉「あいつ、なにしてんだろ」

水木「ずぶぬれじゃない」

石沼「バイト、終わったんですかね」

小泉「あそこだと。雷が直撃するおそれはないかな」

高野、窓を開け。

高野「鈴木くん。鈴木！おーい。鈴木！」

水木「なんか、しゃべってるみたいだけど」

石沼「セリフ言ってるんじゃないですか」

水木「ええ？」

石沼「あそこで稽古してるんじゃないですか」

水木「稽古って」

高野「まさか、そんなことしないでしょ」

火野「なんで、あんなところで。しかも、こんな、夜中に」

かすかに声が聞こえる。

小泉「あ。やっぱセリフだよ」

石沼「バイトで休んだぶんを、今、取り戻そうとしてるんですかね」

小泉「待って。……違う。あいつ、さっきからオイディプスのセリフ言ってるよ」

水木「……ほんとだ」

高野、廊下から、去る。皆、続く。

高野、傘を探す。傘が見つかる。

強烈な雷鳴。皆、耳をふさぐ。

高野は運動場の真ん中にいる鈴木を救出に行く決心をしたのだ。

皆、高野を引き止める。高野、振りほどいて行こうとする。

小泉「今は、やめといたほうがいいって」

皆、一旦、落ち着く。火野が窓の外を見る。

火野「あれ、もう、いなくなった」

小泉「あ、でも、雨がひどくて、見えないだけじゃないかな」

皆、呆然と外の様子を見ている。

高野、突然、出て行く。

高野は、運動場を走り回り、鈴木を探索する。

垂直の稲妻と巨大な落雷。

皆、驚愕の形相。

小泉、水木、火野、石沼が懐中電灯の光を手掛かりに運動場を探す。

小泉「このあたりだと思ったけど」

皆、あたりを探して去る。

誰もいなくなったキャンパス。雨はやや弱くなるが、降り続けている。

鈴木がふらふらと歩いている。

鈴木「娘たち、こちらだ、ついて来い。お前たちがそうだったように、今はおれが、奇怪にも、お前たちの案内者となった。進め、おれにさわるな。このおれがこの地で葬られることになっているその墳墓をおれ一人で見出すことを許してくれ。……こちらへ、こちらへ。こちらのほうへ案内者ヘルメスと冥府の女神とがおれを連れていかれるからだ。おお、おれにとっては光なき光よ、かつては、どうやら、おれのものであったが、今こそ最後におれの身体にはお前は触れるのだ。もうおれは、おれの生涯の果てをハデスのところに隠しに行くのだ」(と、顔にかかる雨を手で拭う)

鈴木、去る。

小泉、水木、火野、石沼が懐中電灯の光を手掛かりにやって来る。

そこに憔悴しきった高野が立っている。

火野「あ。高野さん」

水木「大丈夫？」

高野「え」

水木「ああ。よかった」

高野「なんか。気がついたら、そこで、寝てたみたいで」

小泉「さっき、おまえに雷が落ちたんだぞ」

高野「え。あ、そう。覚えてない」

小泉「そりゃ、そうだよ。こう、こんな感じで、稲妻で一直線に空からおまえまでが、一本の線で繋がったんだから」

高野「へー」

小泉「へーじゃないよ。びっくりしたよ」

水木「すごかった」

石沼「このへん、真っ白になりました」

水木「本番もあんな感じにならないかな」

高野「それは無理かな」

火野「高野さんは鈴木さんを助けに行ったんです」

高野「ああ。そうか。鈴木は？」

水木「どこ行ったんだろ」

高野「……それにしても、なんか、おれ、生まれ変わったような気分だよ」

石沼「ちょっと、触っていいですか」

高野「え」

石沼「雷に打たれた人って、そんなの奇跡じゃないですか」

高野「そう。じゃ、いいけど」

石沼、高野に触れる。

火野「どう」

石沼「え、なんか」

水木「なに。どうだった」

石沼「どうって。なんか、しびれるような」

水木「え、嘘でしょ」

火野「どれどれ」

水木と火野、高野を触る。

高野「なにも覚えてないな」

水木「大丈夫。今日、もう、本番なのよ」

鈴木、が来る。皆、そっちを見る。

鈴木、立ち止まる。

鈴木「さあ、友の中の友よ、あなた自身とこの土地とあなたの家来たちが幸福であるように、そして栄えのうちに、とこしえなるあなたたちの幸のために、死んだおれを忘れないでくれ」

鈴木、去る。

高野「それはおれのセリフだよ」

皆、鈴木に続く。誰もいなくなる。

夜明け前。

合宿所前の道。

火野が来て、あたりに誰もいないのを確認し、鈴木からもらった瓶を取り出し、それを地面に起き、近くの石を使って、割ろうと試みる。何度か振り下ろし、瓶が割れる。中から手紙を取り出し、読もうとするが、なかなか、暗くて字が読めない。

誰か来る気配がして、振り返ると、水木が立っている。

水木「なにしてるの」

火野「あ。いや」

水木「雨、もうやんだ？」

火野「ええ」

水木「それ、割ったの」

火野「え、なにがですか」

水木「瓶」

火野「ああ、はい」

水木「暗くて、読めなかった」

火野「え」

水木「手紙、入ってたんでしょ」

火野「……」

水木「それ、鈴木くんからもらったんでしょ」

火野「……はい」

水木「私もそれ受け取ったのよ。手紙も入ってた。宛先だけが読める手紙。……私の名前だけが書いてあった。鈴木くんは、これは北浦さんからの手紙だと言ったわ」

水木「ただ、私は、そんなふうに割って読もうとは思わなかったけど」

水木「これは、鈴木くんが仕組んだ陰謀だと思う」

火野「え。じゃ、これも鈴木くんが書いたってことですか」

水木「たぶん」

火野「鈴木くんはどうしてこんなことするんでしょうか」

水木「わからない。わからないけど、私はそれでいいの。それを、北浦くんからの手紙だと思うから。読まなければそれはそれで、本当の手紙のような気がする」

火野「そうですか。そうかな」

水木「もうすぐ、夜が明けるわ。そうしたら、その手紙も読める。……火野さんは、それを読むの、それとも読まないの」

火野「読みません」

水木「どうして、せっかく割ったのに。読めばいいじゃない」

火野「なんか、気持ち悪い。吐きそうです」

水木「私はね。北浦くんのこと、今でも愛してるから。それがたとえ偽物の手紙でもいい。でも、あなたは、そうじゃない。ただ北浦くんに愛されたいんでしょ。だから、確かめたかっただけ。それを読んで、愛されているのか、いないのか。そこにどんな言葉が書かれているのか知りたかったんでしょ。……でも、それが偽物だとわかったら、読まないのね。いい？私は、そうじゃない。それが本物でも偽物でも、北浦くんが書いてようが、鈴木くんが書いていようがどうでもいい」

火野「やめてください」

火野「もう、いいから。お願いします、もう、それ以上、なにも言わないでください」

水木「今日の上演、うまくいくといいけど」

水木「よかった。雨が上がって」

水木、去る。

火野、手紙を握りしめている。

日が昇り、正午になる。野外劇場。演劇部員たちと観客、集まって来る。

コロノスのオイディプス、開演。

高野「めしいのこの老人の娘、アンティゴネよ。われらが着いたこの土地は、何というところ、何という人たちの町であろうか。このさすらい人オイディプスを、今日この日、誰が迎え、乏しい喜捨を投じてくれることか。わずかなものをおれは乞い、それよりももっとわずかなものを得るだけで、おれは満足するのだ。忍従、これを数々の不幸、おれが共に生きて来た長い年月、最後に気高い心が教えてくれるからだ。人間の土地でもよし、神々の森でもよし、坐るところがあれば、娘よ、おれをとどめて、坐らせておくれ。われらのいるところはどこなのか、尋ねたいのだ。他所者のわれらは、土地のものから教わって、その言うとおりにしなければならぬのだからな」

水木「お気の毒なお父さま。町を囲む塔と城塞は、見たところ、遠くにございます。この土地は、明らかに、尊いところ、桂、オリーブ、葡萄の木が生い繁り、その中ではナイティンゲールが飛び交うて、うるわしい音をひびかせている。さあ、この天然石にお坐りなさいませ。お年寄りには長い道中でありました」

高野「それでは、おれを坐らせてくれえ、そしてこのめくらを守ってくれ」

水木「もう長いあいだのこと、おっしゃるまでもございませぬ」

高野「さて、われらが来たのはどこであるのかか、そなたは知っているのか」

水木「アテナイは知っておりますが、ここがどこかは存じませぬ」

高野「道行く人はみんな、そう言っていたな」

水木「それでは、ここがどこなのか、行って尋ねてまいりましょうか」

高野「そうしてくれ、娘よ。しかし人が住んでいるかどうか」

水木「たしかに住んでおります。まあ、ちょうどよかった。ほら、あそこに、間近に人が見えます」

高野「こちらのほうへやって来るのか」

水木「もう私どものそばにおります、ここにありますから、なんなりとおっしゃいませ」

小泉、来る。上演は続く。

舞台裏。出番を控えた火野と石沼。小さな声。

火野「ね、ちょっとここ不安だから、読んでくれる」

石沼「いいですよ」

火野「ここ」

石沼「妹よ、さあ急ぎまいりましょう」

火野「何をしに？」

石沼「わたしはこがれている」

火野「何を」

石沼「地下の住居を見ることを」

火野「誰の？」

石沼「お父さまの。ああ、かなしや」

火野「どうしてそれが許されましょう？ おわかりになりませんか」

石沼「なぜわたしを責めるのです」

火野「それからのことも？」

石沼「そのうえに、また何事です」

火野「みんないないところで、おかくれになりました、葬いなしで」

石沼「わたしを連れて行って、それから殺して！」

小泉、顔を出し。

小泉「しー」

石沼「すいません」

火野「ありがとう」

石沼、音響の操作に戻る。

鈴木がいる。

火野「ポリュネイケス。ちょっと……ポリュネイケス兄さん」

鈴木、気づいて。

火野、手紙を返す。

鈴木「読んだの」

火野「読まない」

鈴木「どうして」

火野「これ、あんたが書いたんでしょ」

鈴木「え。なんで。違うよ」

火野「だってこれとおんなじやつ、水木さんにも渡してるじゃない」

鈴木「え」

火野「……ああ、不幸なわたし。……このように一人ぼっちで、すべもなく、どこでこののち不幸な生涯を送って良いものやら」

鈴木「これは火野さんのだから。これには火野さんの名前が書いてあるんだ」

火野「やめて」

鈴木「水木さんにも、北浦さんは送ったんだ手紙を。投瓶書簡を海に流したんだ」

火野「やめてって」

鈴木「いいかい。ぼくはね、拾ったんだ。海辺に打ち上げられたいくつもの空き瓶をその一つ一つにはみんな手紙が入ってて、このサークルのみんなの名前が書いてあった。いや、あれはね、この大学の学生みんなの名前だと思う。海に流した宛先のある無数の手紙。すごいことだよ。これは、そうだろ、ね、そうだよ、すごいよね」

石沼「火野さん、火野さん」

小泉「ほら、イスマネ出番！」

火野、舞台へ。

石沼と鈴木、残される。

上演は続く。